JAPANESE FOR FOREIGNERS

外国人のための日本語 例文・問題シリーズ 4

複合動詞

ふくごうどうし

COMPOUND VERBS

Innovative Workbooks In Japanese

監修＝名柄 迪

■新美和昭■山浦洋一■宇津野登久子 著

荒竹出版

外国人のための日本語 例文・問題シリーズ4

複合動詞

新美和昭
山浦洋一
寺津野豊大子
共著

江苏工业学院图书馆
藏书章

荒竹出版

著者紹介

新美和昭（にいみ・かずあき）
1955年上智大学文学部英米文学科卒業。現在，上智大学比較文化学部 Japanese Language Institute 講師。著書に，*Japanese Lauguage Patterns*（共著，上智大学），*Japanese A Basic Course*（共著，上智大学），*Japanese Writings An Approach through Word Families*（共著，上智大学）他がある。

山浦洋一（やまうら・よういち）
1955年中央大学法学部政治科卒業。現在，上智大学比較文化学部 Japanese Language Institute 講師。著書に，*Japanese Language Patterns*（共著，上智大学），*Japanese Writings An Approach through Word Families*（共著，上智大学），'A Gateway to the Japanese Written World'（共著）がある。

宇津野登久子（うつの・とくこ）
1963年上智大学法学部卒業。現在，上智大学比較文化学部 Japanese Language Institute 講師。著書に，*A Complete Course on 'How to Speak Japanese' Grammar. Vocabulary, Translation*（在フィリッピン日本大使館），『日本語のはなし方』（国際学友会），*Pattern Practice Book*（在フィリッピン日本大使館）がある。

外国人のための日本語例文・問題シリーズ4
複合動詞

昭和六十二年十月二十日　印刷
平成五年三月三十日　三版

著者　新美和昭　山浦洋一　宇津野登久子
発行者　荒竹勉
印刷／製本　中央精版印刷
発行所　荒竹出版株式会社
東京都千代田区神田神保町二―三四
郵便番号一〇一
電話　〇三―三二六二―〇二〇二
振替（東京）二―一六七一八七

（乱丁・落丁本はお取替えいたします）
ISBN4-87043-204-8　C3081

© 新美和昭・山浦洋一・宇津野登久子　1987

定価1,800円

監修者の言葉

このシリーズは、日本国内はもとより、欧米、アジア、オーストラリアなどで、長年、日本語教育にたずさわってきた教師三十七名が、言語理論をどのように教育の現場に活かすかという観点から、アイデアを持ち寄ってできたものです。私達は、日本語を教えている現職の先生方に使っていただくだけでなく、同時に、中・上級レベルの学生の復習用にも使えるものを作るように努力しました。

このシリーズの主な目的は、「例文・問題シリーズ」という副題からも明らかなように、学生には、今まで習得した日本語の総復習と自己診断のためのお手本を、教師の方々には、教室で即戦力となる例文と問題を提供することにあります。既存の言語理論および日本語文法に関する諸学者の識見を無視せず、むしろ、それを現場へ応用するという姿勢を忘れなかったという点で、ある意味で、これは教則本的実用文法シリーズと言えるかと思います。

従来、文部省で認められてきた十品詞論は、古典文法論ではともかく、現代日本語の分析には不充分であることは、日本語教師なら、だれでも知っています。そこで、このシリーズでは、品詞を自立語では、動詞、イ形容詞、ナ形容詞、名詞、副詞、接続詞、数詞、間投詞、コ・ソ・ア・ド指示詞の九品詞、付属語では、接頭辞、接尾辞、（ダ・デス、マス指示詞を含む）助動詞、形式名詞、助詞、助数詞の六品詞の、全部で十五に分類しました。さらに細かい各品詞の意味論的・統語論的な分類については、各巻の執筆者の判断にまかせました。

また、活用の形についても、未然・連用・終止・連体・仮定・命令の六形でなく、動詞、形容詞ともに、十一形の体系を採用しました。そのため、動詞は活用形によって、u動詞、ru動詞、行く動詞、来る動詞、する動詞、の五種類に分けられることになります。活用形への考慮が必要な巻では、巻頭に活用の形式を詳述してあります。

シリーズ全体にわたって、例文に使う漢字は常用漢字の範囲内にとどめるよう努めました。項目によっては、適宜、外国語で説明を加えた場合もありますが、説明はできるだけ日本語でするように心がけました。

教室で使っていただく際の便宜を考えて、解答は別冊にしました。また、この種の文法シリーズでは、各巻とも内容に重複は避けられない問題ですから、読者の便宜を考慮し、別巻として総索引を加えました。

私達の職歴は、青山学院、獨協、学習院、恵泉女学園、上智、慶應、ＩＣＵ、名古屋、南山、早稲田、国立国語研究所、国際学友会日本語学校、日米会話学院、アイオワ大、朝日カルチャーセンター、アリゾナ大、イリノイ大、メリーランド大、ミシガン大、ミドルベリー大、ペンシルベニア大、スタンフォード大、ワシントン大、ウィスコンシン大、アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター、オーストラリア国立大、と多様ですが、日本語教師としての連帯感と、日本語を勉強する諸外国の学生の役に立ちたいという使命感から、このプロジェクトを通じて協力してきました。

国内だけでなく、海外在住の著者の方々とも連絡をとる必要から、名柄が「まとめ役」をいたしましたが、たわむれに、私達全員の「外国語としての日本語」歴を合計したところ、５８０年以上にも及びました。この６００年近くの経験が、このシリーズを使っていただく皆様に、いたずらな「馬齢

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の積み重ね」に感じられないだけの業績になっていればというのが、私達一同の願いです。

このシリーズをお使いいただいて、Two heads are better than one.（三人寄れば文殊の知恵）とお感じになるか、それとも、Too many cooks spoil the broth.（船頭多くして船山に登る）とお感じになったか、率直な御意見をお聞かせいただければと願っています。

この出版を通じて、荒竹三郎先生並びに、荒竹出版編集部の松原正明氏に大変お世話になりましたことを、特筆して感謝したいと思います。

一九八七年　秋

ミシガン大学名誉教授
上智大学比較文化学部教授　名柄　迪

はしがき

各国の言語には、それぞれ特有の表現があることはよく知られている。ある文化圏の人のものの見方、考え方、受け取り方はその言語に必ず反映しているわけであるが、日本語では、物事を全体的に、直接感覚的に受け入れ、そのまま表現するのを好むと言われているように、日常的な話し言葉でも、書き言葉でも、動作や状態を表す動詞が実に豊富に使われている。その中でも、一つの特質となっているのが動詞と動詞を結び合わせた複合動詞による表現である。そして、抽象名詞によらず、具体的な動作・状態を表す動詞を多用することによって、生き生きした描写を可能にしている。

英語圏（広く欧米の言語圏の多くを含めて）の学習者の中には、この複合動詞が使いこなせない人が少なくない。これは、英語では、動詞と動詞の組み合わせよりも、動詞と不変化詞との組み合わせの方が、普通だからであろう。例えば、I *walked to* the station. は、日本語では「駅へ歩いて行きました」と言って、「駅へ歩きました」とは言わないこと、「（人に）話しかける」（to *talk to*）は「話す」（to talk）と「かける」（to hang over someone）の結合語であるが、補助動詞「かける」によって、「人に対する働きかけ」が明確に表現できること、また、'to *run away*' ならば、「逃げて行く」、「逃げ出す」、「逃げてしまう」など、複合動詞を使い分ければ、場面場面に合った言い方ができることなど、複合動詞を身につけることによって、一層豊かな日本語表現をすることができるようになると言える。

この書の目指しているところは、動詞を組み合わせることによって可能となる多様な表現方法を、

学生がよく理解し、その意味、用法を使いこなせるようになってもらうことである。生きた日本語の習得を目指す学習者にとって、この複合動詞の用法を身につけることは不可欠なことと言わねばならない。

この書では、できるだけ日常的な場面に即した平易な用例を多くあげるようにつとめた。複合動詞をあつかった教材が非常に少ない現状から、この書が学習者の役に立てば幸である。

一九八七年十月

新美和昭
山浦洋一
宇津野登久子

本書の使い方

一　複合動詞の範囲

ここでは、二語からなる複合語「動詞と動詞」、「名詞と動詞」、「副詞・擬態語と動詞」を取り上げた。

二　章の構成

第一章では、複合動詞の種類、内部構造、働きなど総括的な説明をした。

第二章には、「持ってくる」、「食べてしまう」など二動詞が「テ型」で結びつくものを集め、第三章では、「書きはじめる」、「食べすぎる」など「原型」―連用形―で結びつくものを、便宜上、動詞の意味、働きにより、「時間相」、「空間相」、「様態、程度の相」の三項目に分けて扱った。

第四章では、名詞と動詞、副詞・擬態語と動詞の結合体を扱った。

各複合動詞の用法では、動詞の種類、前項動詞と後項動詞、主動詞と補助動詞など、その働きによりA、Bの項で大別し、より細かい用法の違いは、a、b、cの項で細別した。

例文、練習問題の用例は、簡潔で平易な文を挙げるようにつとめた。また学生にとって、特に問題となると思われる点は、できるだけ英語と対比して理解の助けとなるようつとめた。

三　凡例

文法的まとまりをなす語群は［　］でくくった。

文中で、一つの意味的また用語的まとまりをなすもの、また説明文中の例文は、「　」でくくった。

N……名詞

NP……名詞句

V……動詞、主動詞（補助動詞と区別する場合）

v……補助動詞

N や V に付された数詞 $_1$、$_2$ は、語順を示す

＋……語句の結合を示す

例　[NP＋V_1＋v_2（はじめる）]

たとえば、[手紙を　書き　はじめる] は、NP「手紙を」、主動詞である第一動詞 V_1 の「書き」、補助動詞である第二動詞 v_2「はじめる」の三要素からなることを表す。

＊……（文頭に付加された場合）文が非文法的であることを示す

？……（文頭に付加された場合）文が文法的に疑いがあることを示す

目　次

本書の使い方　xv

第一章　総　論 …… 1

〔一〕複合動詞の形態　1
(1) 複合動詞とは　1
(2) 動詞の種類について　2
(3) 複合動詞の構成要素別による分類　4
〔二〕複合動詞の文法的特徴づけ　5
(1) 構成要素の組み合わせ　5
(2) 複合動詞の意味による大別　10
(3) 「領域」について　13

第二章　［動詞テ型＋動詞］ …… 17

〔一〕［動詞テ型＋くる／いく］　17
〔二〕［動詞テ型＋いる／ある］　25
(1) ［動詞テ型＋いる］　25
(2) ［動詞テ型＋ある／ない］　37

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〔三〕［動詞テ型＋おく］ 42
〔四〕［動詞テ型＋みる／みせる］ 48
(1)［動詞テ型＋みる］ 48
(2)［動詞テ型＋みせる］ 50
〔五〕［動詞テ型＋しまう］ 54
〔六〕授受動詞 60
(1)［動詞テ型＋くれる／くださる］ 60
(2)［動詞テ型＋やる／あげる］ 62
(3)［動詞テ型＋もらう／いただく］ 65

第三章　［動詞原型＋動詞］ …… 73

一　時間相を中心に 73
〔一〕［動詞原型＋はじめる／だす］ 73
〔二〕［動詞原型＋かける／かかる］ 77
〔三〕［動詞原型＋つづける］ 80
〔四〕［動詞原型＋おわる／おえる］ 83
二　空間相を中心に 85
〔一〕［動詞原型＋だす／でる］ 85

〔二〕［動詞原型＋いれる／いる］ 90
〔三〕［動詞原型＋こむ］ 94
〔四〕［動詞原型＋あげる／あがる］ 99
〔五〕［たつ／たてる原型＋動詞］、［動詞原型＋たつ／たてる］ 102
〔六〕［動詞原型＋つける／つく］ 105
〔七〕［おす／ひく原型＋動詞］ 109
〔八〕その他の空間相を表す複合動詞 110
(1) ［動詞原型＋かえす／かえる］ 110
(2) ［動詞原型＋まわす／まわる］ 112
(3) ［動詞原型＋すぎる／ぬける／こす］ 112
(4) ［動詞原型＋とめる／とまる］ 113

三　様相、程度を表すものを中心に 114
〔一〕［動詞原型＋あわせる／あう］ 114
〔二〕［みる原型＋動詞］ 119
〔三〕前項・後項動詞として働く「とる」、「うける」 121
(1) ［動詞原型＋とる］、［とる原型＋動詞］ 121
(2) ［うける原型＋動詞］、［動詞原型＋うける］ 125
〔四〕強意を表す前項動詞 126
(1) ［うつ原型＋動詞］ 126

(2) ［おす原型＋動詞］ 128
(3) ［さす原型＋動詞］ 129
(4) ［つく原型＋動詞］ 131
〔五〕 完遂を表す後項動詞 132
(1) ［動詞原型＋とおす］ 132
(2) ［動詞原型＋ぬく］ 134
(3) ［動詞原型＋あげる／あがる］ 135
(4) ［動詞原型＋きる／きれる］ 138
(5) ［動詞原型＋つくす］ 143
〔六〕 再行、習慣を表す後項動詞 145
(1) ［動詞原型＋なおす］ 145
(2) ［動詞原型＋かえる／かえす］ 146
(3) ［動詞原型＋つける／なれる］ 148
〔七〕 失敗、難易を表す後項動詞 150
(1) ［動詞原型＋わすれる］ 150
(2) ［動詞原型＋そこなう］ 152
(3) ［動詞原型＋すぎる］ 155
(4) ［動詞原型＋うる／かねる］ 157

第四章 ［名詞・副詞＋動詞］ …… 161

〔一〕〔名詞＋動詞〕 161
〔二〕〔副詞・擬態語（ぎたいご）＋動詞〕 168

別冊解答……巻末

第一章　総　　論

〔一〕　複合動詞の形態

(1)　複合動詞とは

最少二つの実質的形態素が結合して、新しい文法的機能と意味をもつ大きな単位を形成する時、そのまとまりを複合語という。そしてその実質的形態素二つともが動詞であるか、あるいは後部形態素が動詞であって、形成された複合語自体が一つの動詞としての文法的性質をもつものを、複合動詞と呼ぶ。これを動詞の面から見ると、複合動詞の構成要素としての動詞は、形態的にも意味的にも、元になる本動詞があるということになる。

複合動詞に類似したものに、使役文や受動文にあらわれる助動詞「させる」「られる」や、動詞を形成する接辞「春めく」「嬉しがる」の「めく」「がる」などとの結合体があるが、これら「させる」「られる」、「めく」「がる」などは、本来単独で実質的動詞としての機能をもたないので、これらとの結合体は、ここでは複合動詞として扱わない。また形式動詞「する」を構成要素とした結合体「対する」、「重んずる」、「立ち読みする」、「いらいらする」などもここでは複合動詞としては扱わない。

(2) 動詞の種類について

諸動詞を扱う上で、その表す意味的性質について述べることが必要となる。ここでは、次のような分類に従うことにする（†印のあるものは文語的な表現）。

- 動詞
  - 動作相の動詞
    - 継続性の動詞
      - 意志性の動詞
        - 自動詞（泳ぐ、歩く）
        - 他動詞（読む、数える）
        - 自動詞（流れる、降る）
      - 無意志性の動詞
        - 他動詞（（火山が）火を噴く）
    - 瞬間性の動詞
      - 意志性の動詞
        - 自動詞（立つ、乗る）
        - 他動詞（始める、止める）
        - 自動詞（割れる、覚める）
      - 無意志性の動詞
        - 他動詞（†酒が彼を破滅させた）
        - 自動詞（〜に）いる）
  - 状態相の動詞（持続）
    - 意志性の動詞
      - 他動詞（会計係をしている）
      - 自動詞（〜が聞こえる）
    - 無意志性の動詞
      - 他動詞（†水素を含む）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com